性善説と、その世俗化

文学部
中国近世思想史講座
吉田公平

人間の本質は倫理性か理性か、善か悪か欲望か、或いは本質などないのか。古来さまざまな本性論が提起されたが、ここでは中国の性善説とその世俗化について述べてみる。

長い歴史をもつ中国では、宋代になると、性善説を基本とする人間観・実践論をうちたて政治的社会的責任を積極的に荷おうとする所謂新儒教運動がおこり、士大夫読書人の支持を得て思想界の主導権をにぎった。朱子学と陽明学はその双璧である。

性善説は先秦時代の孟子が創唱したものであるが、本性とはいかなるものかについて儒教徒がにぎやかに論議して、性善説こそが正しい人間本質論なのだという理解が正統の地位を獲得したのは、南宋の朱熹（一一三〇－一二〇〇）が大成した所謂朱子学以後のことである。この朱子学を批判した陽明学は性善説の再活性化をはかった性善説の原理主義者であった。

明代末期に中国にやってきたマテオ・リッチ（中国名　利瑪竇）たちイエズス会グループは、新儒教の性善説を自力救済論と理解し、被造物である人間は自力で自己救済できるほどに強い存在ではないと批判している。たしかに性善説とは、人間は本来、最高神である天から倫理的に完全な本性を賦与されて「本来完全」であることを確信（悟）して、その「本来完全」である自力に基づいてその自己を実現することを促す自力救済論を意味する。通常、儒教は政治思想・道徳哲学として理解されがちであるが、「悟り」を基とする自力救済を説く宗教思想なのである。中国の思想は、禅宗は勿論、浄土教も道教も基本的には自力主義が基本である。中国医学も同案であり、薬物などはあくまでも補助手段にすぎない。自力主義の伝統の強い中国の歴史において新儒教が支持を得たのは、性善説を自力救済論として整備したからである。

この性善説は、はじめから本性を倫理性（善）とみて、その本来完全なる本性を自力で自己開発し自己実現するとみなしたから、後天的に知識・技能等を習得する「教育」は相対的に軽視されたし、倫理の外にある科学が第一義的に探求されることもなかった。また、政治的行為も為政者がその「本来完全」を対社会的関係の場で発揮する徳治主義を基本とするから、法治主義は重視されなかった。

この新儒教の思想体系に衝撃を与えたのは、イエズス会士たちが紹介した、理性を人間の本性とみる西欧の学術・科学技術である。清朝の考証学・科学思想はその刺戟を媒介にした成果である。

さて、日本で性善説が本格的に論議されたのは江戸時代以後のことである。宗教色を強めた中江藤樹学派、神道を融合した山崎闇斎学派、政治思想に一元化した荻生徂徠学派などが特色鮮明であるが、石田梅岩の所謂石門心学が興味深い。陽明学は性善説の自力主義を実践主体である「心」を基体にして三教をとりこんだ「心学」の典型である。これが通俗化されて、三教一致論が主張された。この王陽明の良知心学→三教一致の心学と展開した心学の構造が、日本では石門心学という形をとったのである。

近代になって西欧思想が時運開拓の主導権をにぎるようになると、性善説を中核とする新儒教は昔日の力を失うことになる。

それでは性善説は全く姿を消したのか、というとそうではない。福沢諭吉の「学問のすすめ」、スマイルスの「自助論」（中村正直訳　西国立志編）、新戸部稲造の「修養」、幸田露伴の「努力論」など、当代のベストセラーは、いずれも自力主義が基調なのである。処世哲学とでもいうべきこれらは、世俗化された自力主義の展開なのである。そこでは、人間の本性がはたして善なのか否か、などという原理的な事柄はもはや問われない。本来性を倫理性に限定することなく、人間一般がもつ潜在的能力を自力で開発し実現することを求めることになる。急速に制度化された近代社会の原理を認めた上で、それに適応しようとする個人のレベルで「修養」という形で自力主義は生き続けたのである。明治・大正期にみられる「修養」ブームはこのことを物語る。それはあくまでも個人レベルに重点がおかれていたから、天下国家論として特に目新しいものはない。だから政治・社会思想として特に着目されることは稀である。しかし、個人の「修養」レベルであるが故に時代をこえて、「教養」として今もある。能力開発とかカルチャセンター活動など現代版心学運動とでもいえようが、当の本人たちは性善説など知る由もなかろう。世俗化と称する所以である。